苦と苦観・苦滅観の問題

——ウパニシャッドの考察から——

山口恵照

一

苦というものが佛教において重要な問題であることは、周知のところであろう。しかし、苦とは何か？　苦は何を意味するのか？　について答えることは、十分に果たされているであろうか？

四諦において、また、法印として説かれているのを見ると、苦が佛教の根本真実であり普遍的真理であることは、争う余地のないところであろう。そして苦が根本真実・普遍的真理であることは、佛教が発祥した時代の沙門（samaṇa, 得道者）・バラモン（brāhmaṇa, 梵智者）において認められていたばかりでなく、後に学派を形成したもろもろのダルシャナ（darśana, 哲学・宗教）にもうけ継がれていたのであるから、苦は総じてインド思想一般の特徴をあらわしていると考えられるが、それでは、苦とはなんなのか？　苦の意味は十分に解明されているのか？　というに、ここに問題があるように思われる。

いうまでもなく、四諦とは苦諦・集諦・滅諦・道諦のことであるが、苦諦・苦集諦・苦滅諦・苦滅道諦ともいわれるところから明らかであるように、苦・集なる現実の因果と、滅・道なる理想の因果との、二重の因果関係を意味す

る。この二重の因果関係は、元来、医方明、すなわちインドの伝統医学であるアーユル・ヴェーダ（Āyur-veda）の理論にも対応するものがあり、[1] 単に佛教独自のものであるとはいい難いが、しかし、苦の意味内容を検討するとき、佛教独自の苦観・苦滅観を見い出すこともできる。

そして苦の法印というのは、周知のように、「諸行無常・諸法無我・一切行苦・涅槃寂静」における「一切行苦」の示すものであり、法印とよばれるところから明らかなように、佛教独自の意味を見出しうるのであるが、元来、バラモンや沙門が肯定し力説した苦の観察、ないし苦の思想を背景として成立し、佛教が学派として展開した頃、同じように展開したもろもろのダルシャナとの相互連関において見ることができるのである。

本稿では、佛教における苦の観察、苦観・苦滅観というものを、佛教興起以前のインド思想の伝統、とくにウパニシャッド（Upaniṣad）の伝統を背景として考察しながら明らかにして見たいとおもう。

二

「苦」は一般には、「ドゥカ」（duḥkha）に由来すると考えられている。ドゥカは通常、「楽」を意味する「スカ」（sukha）に対する。この場合、苦の思想を初期のウパニシャッドに見い出すことは困難なようであるが、実は見い出しうるのである。哲人ヤージニャヴァルキヤ（Yājñavalkya）によると、まさに探究されるべき究極存在である「ブラフマン」（brahman, 梵）「アートマン」（ātman, 我）以外のものはすべて苦である。これは、「現観される直証的なブラフマン、すなわち、万物に内在するアートマンとはなんなのか？」に対して、「あなたのアートマンが万物に内在するアートマンである」と答えて説かれたものである。いわく、「現に呼気をもって呼息し、吸気をもって吸息し、介気をもって介息し、上気をもって上息しているものが、あなたのアートマン、万物内在のアートマンである。ただし、このアートマンは真実の見者・聞者・意者・識者であって、見たり聞いたり意い識るということはできない。こ

のもの以外のものはすべて苦である[2]」と。

右の引用文における苦は、「アールタ」(ārta)であってドゥカではないけれども、意味上、ドゥカの苦に連関する。ヤージニャヴァルキヤのつぎの言葉がこのことを示しているであろう。――「それ(アートマン)は、飢渇・憂悩・愚痴・老・死を超えている。このアートマンを知って、バラモンたちは児子や財産や世界への希望を棄てて、托鉢行に従事する。というのは、児子への希望は財産への希望であり、財産への希望は世界への希望であって、相対するこの両項は、つまり同一の希望にすぎない。このゆえに、バラモンは学究の立場を棄てて嬰童(無智)の立場に立たねばならない。やがて嬰童の立場をも学究の立場をも捨てたときに、牟尼(寂黙)となる。そして非牟尼の立場をも牟尼の立場をも棄てたときに、はじめて真のバラモンとなる。何によってそうなるのか? といえば、何によってもである。これ以外はすべて苦である[3]」

これによると、アートマンは飢渇(aśanāyapipāsā)・憂悩(śoka)・愚痴(moha)・老(jarā)・死(mṛtyu)を超えて不老不死であり、アートマン以外のものは飢渇・憂悩・愚痴に蹤きまとわれ打ち克たれて、苦である。それゆえ、バラモンはアートマンを知り、離欲の托鉢行に従事しながら、老死の苦を超克するように勤めなければならない。ここに、ウパニシャッドの苦観・苦滅観というものをうかがうことができるであろう。

ヤージニャヴァルキヤの思想を伝える右のウパニシャッドでは、実はこのような老死の苦観・苦滅観が最大の関心事であった。――「ヤージニャヴァルキヤどの、万物は死によって蹤きまとわれ征服されているが、祭主は何によって死の追求を脱れることができるのか?」「祭官では勧請官によってである。また、火によって、語によってである[4]」

これは、ヤージニャヴァルキヤがヴィデーハ国のジャナカ(Janaka)王の宮廷にデビューした際の「ブラフマン論究」を飾る最初の問答であるが、ここに、万物の死と死の超克とが問われている。尤も、ヤージニャヴァルキヤの答えは主としてカルマ(行祭)論からなされたもので、彼の本領を十分に発揮したものではない。彼の本領は死の問題意

識を底流として、これより以降、徐々に発揮される。そして死の問題はつぎの問答をもって展開されるのである。

――「ヤージニャヴァルキヤどの、万物は死の食物であるが、死を食物にするような神は何であるか？」「死とは火神である。そして火は水の食物である。かように知るものは、再死を超克する」[5]

そして問答は、輪廻(saṁsāra)・業(karman)の問題をめぐって、さらにつぎのように展開されるのである。――「ヤージニャヴァルキヤどの、人間が死んで、その語は火に帰し、気息は風に、眼は太陽に、意は月に、耳は方位に、肉体は大地に、霊魂は虚空に、毛は草に、髪は樹木に帰し、血液と精液とは水の中に収まったとき、一体、その人間はどこにいるのか？」「アールタバーガ(Ārtabhāga)どの、私の手をとり給え、われら二人だけで検討しよう」[6]

両人はそこでその場を去って論議した。両人が論議したのは業についてであり、また、讃美したのも業についてであった。それは、善業によって幸福なものとなり、悪業によって不幸なものとなる、というのである。[7]

これによると、問答論議は人間の輪廻・再生(再死)にかかわる業の問題を中心として展開したことが知られる。ただし、業の善悪の問題は公開の席ではとり上げられなかったようである。けれども、ヤージニャヴァルキヤにおいては、このような論議のみが目的であったのではなく、論議を尽くしながら、死を超克させるアートマンの智恵こそが問題中の問題であった。このことについては、アートマンが内制者(antaryāmin)であることを説く点が注目されるべきであろう。いわく、「大地に住み、大地よりも内奥のもの、大地はこれを知らず、却ってその形骸となっているもの、そして大地を内より制御しているもの、かくの如きものがあなたのアートマンであり、内制者であり、不死なるものである」[8]

内制者アートマンの説はこのように主張されるが、大地以外のもろもろの宇宙的存在に関しても、また、自己自身、気息・語・眼・耳・意・皮膚・識・精液に関しても、同様にくりかえされている。[9]これによって、アートマンが宇宙的存在および自己自身に関してどのようなものかを知ることができる。つまり、アートマンは不死の内制者として、

万物に住み、万物よりも内奥のものであり、万物はこれを知らず、万物がその形骸となっているもの、万物を内より制御しているものである、というのであるから、万物に対して内在超越者ということになるであろう。というのは、万物が対象化されるのに対して、アートマンは対象化されない根源的主体である。万物は知らないけれども、万物を形骸とし、どこまでも万物を内より制御するものである。このようなアートマンの特性は、万物を万物として織りなす「ブラフマ・アートマン」(brahma-ātman) という点からも、十分にうかがいうるであろう。この点、つぎのウパニシャッドの言葉が注目される。——天の表を窮め地の底にいたり、天地の間に行きわたり、過去・現在・未来をもってよばれるこの宇宙は何物の上に織り込まれているのか？　この宇宙を織りなすもの（貫経）は虚空（ākāśa）にほかならないが、虚空を織りなすものこそ、バラモンたちのいう「不滅なもの」(akṣaram) である。これは、粗くもなければ細くもなく、短くもなければ長くもなく、赤炎でもなければ湿潤でもなく、陰でもなく、闇でもなく、風でもなく、虚空でもなく、無着、無昧、無嗅、無眼、無語、無意、無熱、無息、無面、無量、内もなければ外もなく、何ものをも喰わず、何ものにも喰われない。また、この不滅なものの命示によって、日月は分れて位し、天地も分れている。瞬間も、時間も、季節も、一歳も、各々その処を得ている。また、河川はそれぞれの方向に向って流れている。また、この不滅なものの命示によって、布施する人の処へは人間共が寄り来って讃美し、祭祀を行なう人の処へは神々が寄り来って讃美し、供物を奉ずる人の処へは祖先鬼たちが寄り来って讃美するのである。[10]

万物の貫経である不滅者「ブラフマ・アートマン」は、このように讃美される点から見ると、明らかに万物の本源であると同時に価値の源泉である。しかも、万物を内より制御する内制者として根源的主体である。この点はさらにつぎのように説かれる。——このもの（不滅者）は実に他から見られざる見者であり、聞かれざる聞者であり、意われざる意者であり、識られざる識者である。しかも、これよりほかには見者もなく、聞者もなく、意者もなく、識者もない。かかるものがあなたのアートマンであり、内制者であり、不死者である。これ以外はすべて苦に充ちている。[11]

三

以上、初期ウパニシャッドにおいて苦の思想をうかがいうるものを通覧してきたが、これは、ヤージニャヴァルキヤによって代表されているともいいうるであろう。この場合、苦の思想はアールタをもって示されるもので、スカに対するドゥカではないけれども、ドゥカをもってしても表わされるのである。ドゥカはヤージニャヴァルキヤによると、アートマンの智慧に関して次の詩をもって伝えられている。

われらはこの世において実にこれ（アートマン）を知りうる。もしこれを知らなければ、その破滅は大である。これを知るものは不死となる。けれども、その他のものは、ただ苦悩にのみ沈む。[12]

ここに苦悩というのは、ドゥカのことである。不生不滅のアートマンを知るものは、生滅を超えて不死となり、アートマンを知らないものは破滅に陥り苦悩にのみ沈むというのであるから、ドゥカの苦悩にかかわるこの詩は、この世においてアートマンを知り、老死の苦を超克する真のバラモンの道を説くものであり、したがって、苦悩というものは、アートマンを知らずアートマンに依ることなき無智者、すなわち、飢渇・憂悩・愚痴につきまとわれ老死にうち克たれた有情の輪廻の苦を意味していると考えられる。

輪廻とは、有情の行業（行動）の結果たる限りない生死の交替、すなわち生死輪転（転生）のことであるが、実は初期ウパニシャッド思想家の共通思潮を形成していたものである。ヤージニャヴァルキヤの場合、すでに紹介した範囲からは十分にうかがい難いかもしれないが、中心問題はすでにふれたように、死の超克、つまり、生死輪転からの解放（解脱）であるから、ブラフマン論究の当初から輪廻は問題意識の主座を占めていたであろう。ただし、生死輪転からの解放がブラフマン学者の場合、総じてブラフマ・アートマンの智恵のめざめをもって必須条件とみなされた点は、注目に値いしよう。生死輪転からの解放は、アートマン智者（ブラフマン智者）となることによってのみ果たされると

みなされた。これは、ヴェーダの伝統における行祭本位の行き方とは異なる「智恵の道」(jñāna-mārga) を解脱への道、真のバラモンの道として強調するものであった。

注目すべきは、この道が単に少数のすぐれたバラモンによって独占されたのではなくて、あまねく人類全体に開放しようと企てられた点である。この点については、ヤージニャヴァルキヤとジャナカ王との次の対話が注目されるべきであろう。――ここに、ヴィデーハ国のジャナカ王は莚座から下りて跪きながら云った、「私は貴師に帰命します、ヤージニャヴァルキヤ師よ。私のために教えを垂れてください」「大王よ、あたかも長途の旅行を企てる人は車や船を用意するように、王はすでに以上のようなウパニシャッドをもって装備されています。そればかりか、高貴・富裕な身をもって、すでにヴェーダを習い、ウパニシャッドを学ばれています。かような王がこの世から解放されるときには、どこへ行かれるのでしょうか?」「貴師よ、私はどこへ行くのかわかりません」[13]「では、王の行かれるところについて申し上げましょう」「貴師よ、教えてください」

ヤージニャヴァルキヤとジャナカ王との右の対話は、最初の会合でのものではなくて、少なくとも第三回目の会合の際のものである。最初の会合は、ヤージニャヴァルキヤがジャナカ王の宮廷にデビューしたブラフマン論究の際であったであろう。ブラフマン論究において勝利者となったヤージニャヴァルキヤ[14]は、改めてジャナカ王を訪ねる。このときの対話はジャナカ王の発言からはじまっている。――「ヤージニャヴァルキャ師よ、貴師は何のために見えたのですか? 家畜がお望みで? それとも微妙な定論をお望みですか?」「王よ、そのどちらをもです」[15]

これが第二回目の会合の挨拶であった。このとき、ジャナカ王はヤージニャヴァルキヤをまだ心から尊敬しているわけではなかった。それゆえ、ヤージニャヴァルキヤはジャナカ王に対して、「王よ、だれかが王に伝授したことがあれば、告げられたい[16]」と申し出て、ジャナカ王が学んだブラフマンの諸説を批判したのである。この場合、「ヴァーチ (vāc, 語) はブラフマンである」というブラフマン説をはじめとして、バラモンたちによるブラフマン説[17]がいず

れも父祖伝来の不十分なものにすぎない、ということを一々指摘し論駁し、まさに念想されるべきブラフマンを教示してジャナカ王を納得させたので[18]、王は遂にヤージニャヴァルキヤに帰依し、前記の会合にいたったのである。

この会合においてとり上げられた主題は、一見、輪廻にすぎないようであるが、しかし、そうではなくて、輪廻からの解放・解脱のための智恵の道であり、実はそのために、輪廻解脱の指標として、光明から成る「プルシャ・アートマン」(puruṣa-ātman) の説が開陳されたのである。この説は、結論として「ネーティ・ネーティ・アートマン」(neti-netyātman, 曰非曰非の我) を説くところから見ると、アートマンを知ることによる無畏 (abhaya) の解脱境の達成をめざしていることは明らかである。――「これ (プルシャ) はネーティ・ネーティのアートマンである。不可得である、捕捉されないから。不可壊である、破壊されないから。無着である、染着されないから。無縛であり、何ものをも怖れず、何ものにも害されない。ジャナカ王よ、王はすでに無畏を得られたのです[19]」

アートマンを知り無畏の解脱境が得られるのはなぜか？　というに、アートマンを知ることはアートマンになることであり、しかも、アートマンはネーティ・ネーティ、すなわち不生不滅不壊にして無着無縛無害だからである。かくしてジャナカ王はヤージニャヴァルキヤに対していう、「貴師、われらに無畏の道をとかれた貴師にも無畏が来ますように。貴師に帰命します。ここに、ヴィデーハ国民と私とは貴命を待つものです[20]」

これは、ヤージニャヴァルキヤの智恵の道の教示に対するジャナカ王の感謝の言葉であるが、単に王の個人的な謝意の表示ではなくて、ヴィデーハ国民を代表しての意志表示であり、不死の扉を開いて無畏を実現することを願うヴィデーハ国民の期待に応えることをヤージニャヴァルキヤに望んでいる点で、注目に値する。

ところで、不死の扉を開いて無畏を実現するためには、輪廻解脱の指標とせられた「プルシャ・アートマン」の説をさらに検討しなければならない。仍って、ジャナカ王はこの点をつぎのような問題として展開するのである。――「ヤージニャヴァルキヤ師よ、ここにプルシャ(人)は何を光としますか？」「王よ、太陽を光とします。太陽という

光によって、プルシャは坐し、動き、仕事をなし、帰ります」「まことにその通りです。ところで、ヤージニャヴァルキヤ師よ、太陽が没したときには、プルシャは何を光としますか？」「月がその光となります。月という光によって、プルシャは坐し、動き、仕事をなし、帰ります」「まことにその通りです。ところで、ヤージニャヴァルキヤ師よ、太陽も没し月も沈んだときには、プルシャは何を光としますか？」「火がその光となります。火という光によって、プルシャは坐し、動き、仕事をなし、帰ります」「まことにその通りです。ところで、ヤージニャヴァルキヤ師よ、太陽も没し、月も沈み、火も消え果てたときには、プルシャは何を光としますか？」「語（言葉）がその光となります。語という光によって、プルシャは坐し、動き、仕事をなし、帰ります。それゆえに、王よ、自身の掌すら見わけかねるときでも、語声が聞えると、その方へ赴くのです」「まことにその通りです。ところで、ヤージニャヴァルキヤ師よ、太陽も月も沈み、火も消え、語声も絶え果てたとき、プルシャは何を光としますか？」「アートマンが光となります。アートマンという光によって、プルシャは坐し、動き、仕事をなし、帰ります」[21]

ここには、坐し動き仕事をなす現実のプルシャの光がとり上げられ、太陽、月、火、語と次第し、アートマンにいたっていることが明らかである。プルシャの光は種々にとり上げられるが、結局、アートマンに究まる、アートマンという光こそプルシャの絶えざる光であるという。これは、アートマンがプルシャの真実の導き手、不滅の灯明にほかならないというもので、実に「自灯明」「自帰依」の思想に連関するであろう。というのは、アートマンは後述のごとく、覚醒・夢眠・熟眠のいずれの境位においても常に作らき、肉体や諸器官とは異って自ら光明となり、他を照らし他によって照らされない、と説かれているからである。

四

総じてアートマンは、さきにふれたように、万物に内在する不死の内制者・貫経であって、これが現観される直証

的なブラフマン、すなわち、あなたのアートマンにほかならないと説かれ、要約して、「ネーティ・ネーティ・アートマン」と示された。これはアートマンの不可得・不可壊・無着・無縛・無害・無畏ということを意味するが、プルシャの不滅の光という点とどのように連関するのか？　不滅の貫経・内制者たるアートマンの命示によって、日月・時候・方処の安立はもとより、布施・奉斎・葬祭の善業も定まっている、ということも不滅の光に連関するはずであるが、では、どのようにして連関するのか？

この点については、アートマンはなにか？　というジャナカ王の質問に答えるヤージニャヴァルキヤの次の言葉が注目されるのである。――「（アートマンは）この諸器官において作らいている識所成のプルシャで、心臓における内的光明であります。かれは、不変でありながら、両つの世界（境涯）を逍遙し、静思しつつあるもののごとく、あるいは遊動しつつあるもののごとくであります。というのは、かれは睡眠中にはこの世界と死の諸相を超脱するのです。まことにこのプルシャは生れ出ようとして肉身をうけるとき、もろもろの罪垢と結合する。そして死に臨んで肉身を脱するとき、罪垢を遺棄するのです。このプルシャには、此界と他界との両つの境涯があり、第三の中間界として夢（睡眠）の境涯があります。この中間界の境涯にあるとき、プルシャは〔此界・他界〕両境涯を見ます。そして他界の境涯に通入するにつれて、此界の罪苦と他界の歓楽との両方を見るのです」[22]

現実のわれわれ人間を意味するプルシャにとって常住の光であるアートマンを説いて、まず、生活器官において作らく識所成のプルシャであるという。ここに、総じて現実の人間におけるプルシャとアートマンとの密接な連関が「プルシャ・アートマン」として示唆されている。というのは、アートマンは識（判断）所成のプルシャであるとともに心臓の内的光明であり、この内的光明が不死の内制者・貫経であるアートマンを意味するからである。総じていえば、「このプルシャ（アートマン）は生れ出ようとして肉身をうけるときに罪垢と結合し、死に臨んで肉身を脱するときに罪垢を遺棄し去る」のであるが、生活器官において作らく識所成のプルシャであり心臓の内的光明であるかぎり、

「不変」（自己同一）のものとして、此界と他界との両つの境涯を逍遙する、静思しつつあるもののごとく、あるいは遊動しつつあるもののごとく」。これは、識所成のかれが睡眠中に内的光明として、この世界と死の諸相を超脱して見るものだからである。この場合、睡眠はプルシャの第三の境涯であり、此界と他界とをかけはしする中間界だといわれる。第三の中間界にあるとき、かれは、自身の光輝・光明によって作らき、染着なくして此界・他界の両境涯を見るのである。そして「他界の境涯に通入するにつれて、此界の罪苦と他界の歓楽との両方を見る」。この点については、左の詩が注目される。

睡眠により肉身を抑制し、自らは眠らずして眠れるもの（感官）等を照らし、
白光を帯びて復たその地に帰る、黄金のプルシャ、孤高の鵠なるかれは。
夢寝の中、上行し復た下行し、神なるかれは種々の形相をあらわし、
あるいは婦女たちと笑い楽しむがごとく、あるいは種々の危険に遭うに似る。
世の人はかれの遊園を見うるも、何人もかれ自身を見えない。[23]

直前に引用した「かれの遊園」とは、種々の形相をもって楽しむがごとく、怖れるがごとく、かれが逍遙するところであるが、実に「熟眠」に究まるのである。――たとえば、かの大空において鷹や鷲が思うままに翔け廻ったのち、疲れて双翼をすぼめ、臥床へと降りて行くように、このプルシャは上記の夢の境涯からさらに進んで、何の欲望をも発さず、いかなる夢をも見ないような極処へと移って行く。この際、自身を人々が殺害するように思ったり、征服するように思ったり、また、自身が陥穽の中へ墜ちたように思ったりするのは、すべて覚醒時に見た危険を無智のためにそこにあるかのように妄想しているのである。しかし、自らが神であるかのように、王であるかのように思い、私は宇宙である、私は万物である、と思うならば、それはかれの最高界である。これこそ、かれの欲望を超え、罪苦を攘い去った無畏の相である。たとえば、愛する婦人に抱かれているときには、内外両界の何ものも感知しないように、

このプルシャは智恵のアートマンに抱かれた結果、内外両界の何ものをも感知しないのである。これこそ、かれの所願満足の相、自己を所願とする相、いな、無願の相である。これこそ苦外(無苦)の相である。要するに、福徳にも罪苦にも纏われない相である。というのは、心臓の一切の憂患を超脱しているから。ここに、かれは水のごとく澄明・独一、絶対の見者となる。これがブラフマン界であり、また、かれの最高の帰趣、最高の成満、最高の世界、最高の歓喜である。他の生類はこの歓喜の一小部分においてその生を営む。[24]

以上は、ジャナカ王の解脱の質疑に応えたヤージニャヴァルキヤの説であるが、不滅の光明・アートマンがこのように熟眠において独一絶対の見者として最高のプルシャであるというのは、一切の存在と価値との究極の源泉であるブラフマ・アートマンを万人に開放し、ブラフマ・アートマンに依り、万人をして苦を超脱し最高の歓喜を得させようとするものにほかならない。このプルシャ以外の他の生類は、祖先界ないし生主神界にいたるまで、この歓喜の一小部分においてその生を営むにすぎないからである。もし人間の中に幸運な成功者で、他の人々の主人公となり、あらゆる人間の享楽を具えた者があるとする。これが人間最高の歓喜であるが、かのプルシャの最高歓喜は遠くこれを超えている、この歓喜の幾百千億倍にも相当するのである。[25] およそ万物はことごとく業報輪廻の境涯においてあり、業報輪廻の道理を免れることはできない。いかなる人間も、その行為と行状とに相応したものとならざるをえないのである。善い行為をする人間は善人となり、悪い行為をする人間は悪人となる。つまり、その欲望に従って意志を決め、意志通りに行為し、その行為に相応したものとなるのである。[26]

およそ欲望に絆されざるもの、つまり、欲望なき人間、欲望を脱し、欲望を満足し、アートマンを欲望対象とするものは、不死のブラフマン界に趣くのである。[27]

人の心臓に宿れる欲望のすべてが離散するとき、
応死者は不死となり、そのままブラフマンにいたる。[28]

かくて離欲をモットーとなしアートマンの智恵をめざす古聖の道が強調される。――諸器官における識所成のアートマンは、偉大にして不生である。善行によって偉大とならず、悪行によって劣少となることもない。一切の自在主・治主・主神・王者として心臓内の虚空に休らい、万物の主権者として万物を保護しつつある。バラモン達は聖典の学習・祭祀・布施・苦行等によってこのアートマンを知ろうと努めてきた。かれを知れば牟尼となるのである。遊行者たちはまた、かれを唯一の世界として願いつつ遊行している。まことに古えの聖者たちは、これがかれであると知って児孫すらも望まなかった。このアートマン、この世界をもつわれらには児孫に何の用があろう、と思ったからである。かれらは実に児孫への希望、財産への希望、世界への希望より超越して托鉢行を修したのである。というのは、児孫への希望は財産への希望であり、財産への希望は世界への希望であって、この両項はともに同一の希望にほかならないから。[29]

ここに注目すべきは、このようにアートマンの智恵をめざす古えの聖者の道が、ジャナカ王やマイトレーイー(Maitreyī) 夫人によって心から賛同されたばかりでなく、[30] 聖道の提唱者ヤージニャヴァルキヤによって大きく拓かれて行ったことである。[31] かれが説いた聖道の原点ともいうべきアートマンの智恵・純愛・思慕[32]こそは、飢渇・憂悩・愚痴・老死の衆生を遍く解脱させるものとして、「四聖諦」の先駆であるともいうべきであろう。[33]

註① 一般に医師が病状を診断してその原因をつきとめ、無病の健康態をもたらすために治病の方法を講ずる場合、病状は「苦」、原因は「集」、健康態は「滅」、方法は「道」に対応するから、ここに四諦がアーユル・ヴェーダ（医方明）の理論に対応することが予想されるが、四諦はまた科学一般の研究方向とも一致するものがある。およそ科学は研究対象において因果の法則を発見することを任務とするが、これは、苦集二諦の観察に対応する。また、発見された法則は人類の要請する事物や状態を作り出す応用研究に関係する。これは滅道二諦の観察・実践に相当するといえよう。

② B[ṛhadāraṇyaka] U[paniṣad], III, 4, 1～2. ウパニシャッドのテクストは主としてアーナンダ（Ānanda Āśrama Skt.

S.) 版じゃの°

㉓ BU, III, 5, 1. Cf. BU, IV, 4, 22.

㉔ BU, III, 1, 3.

㉕ BU, III, 2, 10.

㉖㉗ BU, III, 2, 13.

㉘㉙ BU, III, 7, 3～23. Cf. Ch〔āṇdogya〕 U〔paniṣad〕, VI, 12, 2; VI, 16, 3.

㉚ Cf. BU, III, 8, 3～9.

㉛ Cf. BU, III, 7, 23: eṣa ta ātmāntaryāmy amṛtaḥ: adṛṣṭo draṣṭā, aśrutaḥ śrotā, amato mantā, avijñāto vijñātā. nānya'to'sti draṣṭā, nānyo'to'sti śrotā, nānyo'to'sti mantā, nānyo'to'sti vijñātā: eṣa ta ātmāntaryāmy amṛtaḥ: ato'nyad ārtam (Cf. BU, III, 5, 1; III, 8, 11).

㉜ ihaiva santo'tha vidmas tad vayam, na cet avedir mahatī vinaṣṭiḥ.
ye tad viduḥ, amṛtās te bhavanti, athetare duḥkham evāpiyanti (BU, IV, 4, 14).

㉝ BU, IV, 2, 1.

㉞ Cf. BU, III, 1, 2: brahmiṣṭhaḥ (cp. ibid., III, 9, 27).

㉟ BU, IV, 1, 1.

㊱㊲ BU, IV, 1, 2.

㊳ BU, IV, 1, 2～7.

㊴ sa eṣa neti nety ātmā agṛhyaḥ, na hi gṛhyate; aśīryaḥ, na hi śīryate; asaṅgaḥ, na hi sajyate; asito na vyathate; na riṣyati abhayaṁ vai, janaka, prāpto'si (BU, IV, 2, 4).

㊵ abhayam tvā gacchatāt, yājñavalkya, yo naḥ, bhagavan, abhayaṁ vedayase; namas te'stu; ime videhāḥ ayam aham asmīti (ibid.).

㊶ BU, IV, 3, 2～6.

㊷ BU, IV, 3, 7～9.

㉓ Cf. BU, IV, 3, 11～14 (cp. ChU, VII, 26, 2).

㉔ Cf. BU, IV, 3, 19～32.

㉕ BU, IV, 3, 33.

㉖ Cf. BU, IV, 4, 5.

㉗ BU, IV, 4, 6.

㉘ yadā sarve pramucyante kāmā ye'sya hṛdi śritāḥ,
atha martyo'mṛto bhavati, atra brahma samaśnute (BU, IV, 4, 7).

㉙ Cf. BU, IV, 4, 22.

㉚ so'ham bhagavate videhān dadāmi, māṁ cāpi saha dāsyāyeti (BU, IV, 4, 23); yenāhaṁ nāmṛtā syām, kim ahaṁ tena kuryām. yad eva bhagavān veda, tad eva me brūhīti (BU, IV, 5, 4). ここに、不死にいたる聖道にかかわる師弟の相互敬愛が輝いている。

㉛ vijñātāram are kena vijānīyāt, ity uktānuśāsanāsi maitreyi; etāvad are khalv amṛtatvam, iti hoktvā, yājñavalkyo vijahāra (BU, IV, 5, 15). アートマンの智恵をマイトレーイー夫人に説く最後の段階を示すものであるが、ここに、出家の聖道「アーシュラマ」(āśrama) が万人に開放されている。

㉜ ātma-kāma (cf. BU, IV, 5, 6 ff.). ここに、アートマンの智恵が「慈悲」の精神と一つであることが明らかに示されている。アートマンの智恵は慈悲の精神を措いて他には存しない。

㉝ 苦の思想を主題として、佛教の先駆をウパニシャッドにおいて探求しようとしたのであるが、紙幅の都合もあって序説の段階にとどまったことを、お断りしなければならない。ウパニシャッドについては、ドイッセン(P. Deussen)、ヒューム(R. E. Hume) 等先学の諸書参照。邦訳については、佐保田鶴治『ウパニシャッド』(東京・昭和五十四年)、辻直四郎『ヴェーダとウパニシャッド』(東京・昭和二十八年) 等、参見。